

我流子育て支援論 ～ 乳児期 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

妊娠も後期に入ると、母親は段々早く生まれて欲しいと思うようになる。実際は一人身のほうがずっと楽なのだが、うつ伏せで寝られない辛さ、おなかの重たさ、腰も痛くなるなどから、早く生んでしまいたい、身軽になりたいと思う。最近では男女の別を教えてくれる病院もあるようだが、最終的にはどちらでも良いから五体満足に生まれてくれればよいと思うのが一般的な親だろう。私自身も3人の子の親だが、毎回思うことは元気に生まれてくれればということであった。

出産の辛さは、何度経験しても痛いし苦しい。こればかりは、母親にしか分からない辛さであろう。一般的に母親は妊娠中、胎動を感じながら徐々に母親としての自覚を育ててくる。そして、最後に出産を通じて、母親となった感覚を持つことが出来る。一方父親は母親のお腹が

大きくなり、胎動を外から感じることにうらいしか出来ない。

出産前の支援として、父母に父、母になる意識を持ってもらおうと、何処の自治体でも母親教室や父親教室を盛んに実施しており、担当者は毎年様々な工夫を凝らし、初めての子育ての手助けをしている。

母親教室や父親教室に参加される方々はそもそも子育てに興味を持っていたり、学ぼうという気持ちがあると思いたいのだが、最近では、ファッションの一部、或いはゲーム感覚の様に教室に参加し、手技を学ぶということもある様に感じる。支援者としては、その場で、母親や父親になる人の様子を確認することも出来るので、こうした教室に参加してくれるとフォローしやすい。実際、教室での様子から、ずっと支援に乗っていくケースも

ある。

そのほか、様々な育児書や育児雑誌、祖父母から伝達されたものも含め、知識として得る手段は多い。むしろ情報過多の傾向があると言えよう。前章でも述べたとおり、育児の手本が自分の両親や兄弟等生身の人間である人より、育児書やネットと言う傾向が強い。育児書は平均的な内容を記載しており、個体差については、十分述べられていない。育児書どおりに育っていないとそれだけで母親たちは不安になってしまう時代である。うまく育児書を使う方法を伝授しなければならない。

育児書は一冊にする、ネットは見ない、分からないことがあったら聞く人を決めるなどのアドバイスをしている。不安な母親はそれでは満足しないのだろうが、とりあえずはその様に伝えておくことが必要だと思っている。

一方で、年齢相応の発達ということを理解していない母親が意外に多いことにも驚いている。母親からの質問の例であるが、「子どもに一人で片づけが出来るようにさせるにはどうしたらよいか？（1歳半）」「箸でご飯が食べられない（6ヶ月）」「おしっこを教えない。おむつがとれない。（10ヶ月）」などなど、一瞬どう答えようかと迷ってしまう質問に出会うことも増えた。頭ごなしに否定しても、自尊感情が低い母親達にはマイナスの効果しか生まない。発達の順序、年齢相応と言うことをゆっくり伝えていくしかない。

こうした状況から生まれたのがさまざまなグループ支援である。新米の母達を、一人一人支援していくより、グループで

支援した方が合理的であり、しかも教える形の講座より仲間感覚を生むことも出来、効果的である。

例えば、10代の母親たちを集めたヤングママのグループや、多胎の母親グループ、30代前後の母親のアラ・サー・グループ、最近増加傾向にある40代前後を集めたアラ・フォー・グループ、孤立しそうな母親、不安の強い母親、子どもを叩いてしまう母親などには、MCG（Mother&Child Group）など、ピア・カウンセリングの要素を持たせたグループ支援がある。もちろん、誰でもグループが良いと言うわけではない。個別支援の方が向いている場合は、育児相談で対応したりしている。グループが向かないケースとは、精神障害の状態が不安定だったり、発達障害や人格障害が疑われ、客観視ができず、他者攻撃が激しいなど自己中心的で場に良い影響を与えない、或いは場の雰囲気崩すとされるケースである。

子どもを育てる上での支援は、このほかにも、児童相談所はじめ、子育て支援センター、子育てサークル、子育てサロン、幼稚園や保育所での地域開放等による支援、様々な電話相談など、山のようにあるが、在り過ぎも又問題になる。

あちこちで相談してしまう不安の強い、自尊感情の低い母親は、助言がばらばらになることで余計不安になり、カウンセリングに飛び込んで来る。そんな母親達には、グループを紹介したり、相談する場所を一箇所にするなどの調整をし、母親本人の原家族の問題から始めて母親自身を育てることに時間を掛けることになる。

また、母親自身や子どもにさまざまな病名を付けてくるケースもある。「ネットで調べた結果自分は〇〇だ」「この子は××だ」と言い張る。〇〇や××の情報には、誰もが持っている傾向も含まれていたりする。

ここ20年、よく聞くようになったアスペルガー症候群もその診断基準には多くの人に見られる傾向が含まれている。人と接することが苦手、空気が読めないなど。高校のスクールカウンセリングをしていると、相談に来る子の殆どが、「人と接することが苦手」だったり、友達から「空気が読めない」と言われていたりする。だからと言ってこの子達が皆アスペルガー症候群なわけではない。ADHDでも同様である。1歳半から2歳半にかけては、言葉も未熟で、動きが激しく、「制止が効かない」などはどんな子にもある程度見られる。しかし、よく分かっていない母親達はそれをすべてADHDとってしまう。

ここには、マスコミの弊害があると思う。何でも報道すればよいと言うものではない。もちろんネットの問題もある。情報は何でも得られる時代だからこそその問題である。

アスペルガー症候群やADHDという障害名が出来たのは、もうずっと前のことである。ネットやマスコミで知らされなければ、殆どの親はわが子や自分にそんな障害名をつけることは無かっただろう。病気や障害については、知れば知るほど不安を呼ぶということをマスコミは抑えておくべきではないかと思うのである。

世の中何が正しくて何が間違っている

のかも曖昧になりつつある。子育ての指針が分かりづらくなっても仕方ない。もっと情報を制限し、母親達が右往左往しなくて済むような支援を構築しなければならない。そのための視点がいくつかある。

一つ目は「見過ぎ」をどうするかと言う視点である。

私が講座でよく言う言葉は、「適当、ほどほど、好い加減」である。昔の子育てが良かったと言うわけではないが、子どもに集中しすぎている現代の子育ては、親にとっても子どもにとってもストレスフルではないかと思う。

片目瞑る位でちょうど良い。四六時中子どもの一挙手一投足を見ていたら、気になることを探しているようなものである。

昔は洗濯も、掃除も、料理も、自動の部分で殆ど無かったから、子どもは負ぶって家事をこなしていた。背中で子どもは安心して寝たり、声を出せば母親がそれに応えてくれたり、密接だったが、顔が見えていたかと言うと後ろにいたので見えない。機嫌が悪ければ泣くので、それと分かる程度である。

しかし、ベビーベッドや、ベビーチェアにいる子、抱っこしている子の顔は良く見える。ちょっとした変化に一喜一憂してしまうのは無理のないことだろう。その反応に子どもも反応してしまう。子どもは余計神経質になってしまうだろう。見ないようにするのは見るようにすることよりずっと難しい。

二つ目はどうしたら父母を含む周囲の大人がちゃんと大人になるのかと言う視点である。

よくある相談に、「夜泣きがひどい」と言うのがある。夜泣きは近所迷惑だし、寝ている父親にも気を使うし、母親としては本当に困ってしまう問題である。しかし、病気が無く、どこか痛いとかきついというような所も無く、暑すぎず、寒すぎず、おしめもきれいでお腹も一杯であれば、放って置いても大抵は大丈夫である。子どもは泣くことも運動のひとつであり、夜中であろうが泣くことは仕方ないと周囲も思ってくれると分かっているれば、母親もそれほど神経質にならず、悪循環に陥ることは無いだろう。しかし、自己中心的な近所さんは「うるさい！」と文句を言ってくるし、同様に自己中心的な父親も「何とかしろ！」と母親を責める。父親も子どもの製造責任者であり、仕事を理由に自分だけがのうのうと寝ていて良いと言うことにはならない。子どものことは父母一緒に負担すべきことであろう。母親が精神的に安定していれば、夜泣きも自然に治まるものであろう。「赤ちゃんなんだから仕方ない。我慢しよう。」と考える大人、許容量のある大人が少なくなったことに問題があるとも言えよう。

夜泣きの次に乳幼児期に一番多い相談は、2歳前後の「いやいや期」の対応である。言葉が少し話せて、何でも自分でやろうとするし、興味も広がり、いじって欲しくないものを目ざとく見つけて片端からいたずらする時期である。夜泣き同様、この時期はどんな子も大変なのだということを周囲の大人も母親たちも知っていれば、もう少し気持ちが楽になると思うのだが、理解の無い夫や周囲の大人たちの目を気にしすぎて、子どもをヒ

ステリックに怒鳴りつけたり、叩いたりする母親に度々出会う。また、母親自身の思い通りにならないからと怒鳴ったり叩いたりする母親にも出会う。どちらの場合でも、子どもにとっては同じに見えるだろう。

親が大人になりきれて居ないばかりではなく、周囲の大人も大人になりきれて居ないから、子育て中の母親たちが追い詰められるのではないか。子どもだらけの世界で、乳幼児が育つのは難しいだろう。

三つ目が世代間境界の視点である。

少子高齢化のこの時代、子どもが生まれると、その子の親、祖父母、場合によっては曾祖父母まで元気だったりする。それぞれが小金もちで、子どもはこの上なく恵まれ、何もかもあって当たり前な生活を送っていたりする。その様な状態であるから、乳児の時期はさぞ愛情に恵まれてと思いがちだが、祖父母の口出し、手出しに自信を失くした母親がカウンセリングに訪れる。「祖父母が子どもを連れて行ってしまふ。自分の子育てを否定される。」と泣いているのである。これでは母子の愛着形成に歪みが生じてしまう。自分の上の子を祖父母に取られ、下の子二人を連れて実家を出た母親に出会ったが、実家にずっといたことがいけなかったと今更ながら後悔していた。

祖父母が比較的元気なことも、問題を複雑にしているのではないかと思う。現役で働いている祖父母は、金銭的にも体力的にも力を持っている。お金の流入があれば、口出しもある。祖父母が強すぎることで、父母の力が弱まり、父母の自立が妨げられる。その結果として、子育て

ても阻害されてしまうのではないか。

「老いては子に従い」と言う言葉は死語なのか？「良かれと思って・・・」の行動が良い結果を招いたことはあまり無い。父母が子どもとの家庭を、悩みながら、相談しながら営んでいくことが、子どもの成長には大切だと思う。祖父母と同居であっても、世代間にきちんと境界が設けられていることが必要であろう。

そして四つ目、虚像と情報の影響をどうするかという視点がある。

前述のとおり、昔は、手動の時代で、家事そのものにとっても手をとられ、子育てに十分時間を掛けられなかっただけでなく、母親自身が自分のことに手をかけられる時間など殆どなかった。私の母親も朝起きてから寝るまで、バタバタと過ごしていたし、自分自身もそのような子育てだった。何処の家でも同じ状況なので、誰も不満に思うこともなく、そうした生活を通じ親も子も忍耐強さ、我慢強さが育っていたと思う。

しかし、今の子育ては、家によって差があるものの、何でも欲しいものがローンで手に入るので、車も家も家具も家電も良い物を揃えている。しかも、もっときれいな家、素敵な家具、可愛い子どもに素敵なだんなさん、幸せ一杯の家族の虚像がテレビを通じて常に目の前で展開されているのである。ちゃぶ台をひっくり返すような家ではないし、髪振り乱して子育てをしている母親像も流れては居ない。

こうした虚像を毎日見ていれば、自分の子育て、自分の生活に不満を感じるようになっても無理はない。「こんな筈では・・・」「夫が悪い」「この子が悪い」

「私のやり方が悪い」・・・そんな思いが母親たちの心に生まれてくる。そして火に油を注ぐようなマスコミの報道。「片付けられない女性」「虐待」「ゴミ屋敷」「発達障害」「精神障害」携帯ブログの書き込みにも、子育ての悩みが並ぶ。

一方で子育てより自分の楽しみを優先している親たち、子どもを自分の楽しみに巻き込んでいる親たちの何と多いことか。それもこれもマスコミやブログから得た情報を元に、自分もこうしても良いと思って実行する。知らなければやらなかったことが多いのではないかと思うのである。

最近見かけて気になるのが、生まれて間もない子どもを連れ歩くことである。妊婦の床上げは産後1ヶ月。検診も1ヶ月。病院受診は仕方ないにしても、1ヶ月に満たない乳児を買い物やタバコの煙がもうもうとした飲み屋などに連れて行くのはどうか？できれば、3ヶ月は買い物など人ごみに連れて行かないほうが良いと思うのは老婆心か。ましてや飲み屋など、言語道断。しかし、病院に風邪をひいて入院する新生児をみるとそう思わずにはいられない。

また、救急電話に「体温計は耳で測るのとわきの下で測るのとどっちが良いのか？」と尋ねてくる母親は、知らないことを誰にも聞かないで滅茶苦茶な事をしてしまう母親よりは良いのかもしれないが、体温計が種類しかなければ迷わない筈である。なまじ物があふれ、種類が多すぎると悩むのは、誰でも同じであろう。もう少し、世の中が単純だったら、こんなに母親たちは悩まないで済むのではと思う。必要な情報と蛇足的情報を分

けて情報の渦から母親たちを引き上げてあげること我々支援者の務めなのかもしれない。

母親教室や父親教室、育児についての講演会、様々なグループ支援や個別支援を通じて、子育ては元々楽なものではないという認識を持たせ、生まれた子を育てるスキルを伝えていながら、「子どもを程ほどに見るようになる」「子どもだから仕方ないと思える」「祖父母との境界を引ける」「情報を整理できる」力を父母に付けることが出来れば、きっと乳児期の子育て支援はほぼ満足のいくものになるのではと思っている。

次章では、幼児を取り巻く環境と子育てについて書いてみようと思う。

